

神社と戦争

2020年8月9日 平和祈念礼拝 S.M

2年前の正月に、立憲民主党の党首や主だったメンバーが揃って盛装し伊勢神宮を参拝したという報告が党の公式 SNS で流されました。それを見て私は強い違和感を覚えました。ネットの反応は私と同じような否定的なもの、問題ないという反応、2つに分かれました。前者の意見は「政教分離に反する」「戦争の精神的支柱となった伊勢神宮に党行事のような形で参拝するのは問題である」、後者の意見は「靖国神社ではないのだから問題ない」「日本人として正月に伊勢神宮に詣でるのは自然なこと」というのが根拠のようでした。同党は少なからぬ批判や疑問に対し何の反応もせず、翌年以降も参拝を続けているようです。

私は、仮にこれが伊勢神宮への初詣でなくキリスト教の新年礼拝であったら「政教分離に反する」という批判はかなり大きくなっていただろうのではないかと思います。しかし神社、特に伊勢神宮であれば違和感を持つ人が少ない、これは何故なのかと考えるに、明治から第二次大戦までの、「国家神道としての神社」という性格が今も強く尾を引いているからではないかと思えます。

新型コロナのために図書館でゆっくり資料を探すことができないので、自宅で市の電子図書館のリストを見ていたところ「伊勢神宮と戦争—宗教が国家の道具となる時」朝日新聞セレクト（朝日新聞 2012 年発行）というのが目に入り早速借りてみました。これは 2012 年 8 月に朝日新聞に掲載されたシリーズ記事をまとめたものようで、「国家総動員体制」「少国民」「戦勝祈願」…など 8 つのタイトルで、当時を知る人々の証言をもとに、伊勢神宮と戦争および国家との関係を考えさせるものです。以下、内容を少し紹介します。

○伊勢神宮への参拝者は明治～大正時代は年間 100～200 万人だったのが、日中が全面戦争に突入した 1937 年に 200 万人を超え、対米英戦が始まった翌 1942 年には 780 万人に迫った。1942 年に修学旅行で伊勢神宮を訪れた人は「兵隊さんの武運長久を祈るように先生から訓示された」「参道には大砲など日清・日露戦争の戦利品が並んでいた」「あの頃、伊勢神宮といえば戦争を連想した」と振り返っている。1941 年の地元紙には「神宮の柱には人の波、旗の波…大前に恭しく戦勝の祈願をなし…」と記されている。

○昭和 13 年、日本政府はナチスの青少年組織「ヒトラー・ユーゲント」の 40 名を招き、伊勢神宮はじめ全国各地の神社を案内した。その目的は「神国日本を誇示すること、維新後の飛躍の原因は天皇制と国家神道という独特の文化にあると示すことであった。」(北九州市立大学・中道寿一教授)

○当時子供は「少国民」と呼ばれ、将来の皇国・皇軍を背負って立つことを期待された。日本少国民文化協会が作った「愛国イロハカルタ」の「イ」は「伊勢の神風 敵国降伏」、「エ」は「英霊しずまる 靖国神社」だった。

○1945 年 1 月、伊勢神宮は空襲被害にあった。軒先や障子の破損、板塀が倒れた程度だったが、大本宮発表は「齋館 2 棟、神楽殿 5 棟崩壊せり」とあり、当時の神宮の日誌には「発表は誇大で神宮職員をも一驚せしめた」とある。新聞は大本宮発表のまま「醜弾、伊勢の神域を汚す」「米、鬼畜の本性を現す」「神ながらの国、神ながらの民族に対するこれ以上の挑戦はあろうか」と煽った。軍事史家の原剛氏は「戦意高揚のため誇張して発表したのかもしれない」と推察する。その後十数回の空襲に見舞われ市街地は 6 割が焼失したが、神宮への類焼を防ぐため周辺の民家が強制疎開させられたこともあり社殿は無事だった。

○敗戦後、海外の目には国家神道が日本人を狂信的な戦闘に駆り立てたと映り、存亡を心配した神宮は日清・日露戦争の戦利品（大砲や錨など）を鉄くずとして処分した。戦後の参拝者は激減、進駐軍は閑散とした参道を見て「こんな広い面積はいらない」と発言するなど、神職らが気をもむ日々を経て神宮は危機を乗り越えた。

○元首相の石橋湛山は、東洋経済新報社の社長だった 1944 年、伊勢を参拝した際「日本が一日も早く戦争に負けるように祈った」とのこと。「理性に寄らず、衝動による熱狂、付和雷同ほどおそるべきものはない」と以前から挙国一致に抵抗し続けてきた。石橋湛山記念財団評議員の山口正氏は「本来、何を祈るかは人それぞれで、強いられるものではない。神道が国に利用され、信じ込まされた時代、ほとんどの人が同じ方向を向いているのに湛山は自分を見失わなかった」と述懐する。

以上を読むと、天皇を頂点とした挙国一致の手段として神道という宗教が国家に利用され、人々が容易にマインドコントロールされていった怖さを改めて感じます。今は神国日本などとあからさまには謳われませんが、冒頭の初詣のように政治家がこぞって参拝すること、あるいは学校教育などにより、日本人

ならば「日本古来の神々」を拝むべきという風潮が強くなると、そうでない人は「普通の日本人」ではないという圧力がほかの宗教を信じる人たちにかかってきます。その点で、政治家は宗教的行為については一般人の何倍も慎重になる必要があると思います。

昨年の 5 月は天皇の代替わりで「令和の御代」などと国民はお祝いムード一色になりました。私は今の天皇陛下と同学年ですので個人的には何となく親しみを持っていますが、それとは別に「天皇陛下万歳」と皇居で国旗を振っている人々を見ると、一歩間違えば天皇崇拜につながり戦前戦中と同じように国家に利用されかねないのでは、と少し恐ろしさを感じます。あれだけの惨禍・犠牲を経て憲法で戦争放棄、政教分離、信教の自由、国民主権等が謳われているのに、日本人の内面はあまり変わっていないのだと思わされます。今の日本国憲法はアメリカに押し付けられたものだから改正しようという動きがありますが、私は押し付けられた＝自分たちで勝ち得たものでないから、良いものであっても根付いていないことこそが問題だと思います。

このような国にあって周りに合わせ何となくあいまいな態度をとっていると、黙示録 3：15～16 のように神様から吐き出されてしまうのではないか、さらにはいつの間にか人前で主を「知らない」と言ってしまうのではないか、と心配になります。コロナ禍がいつまで続くのかわからず感染者も日増しに増える中、自分の人生もいつ終わりになるかわからないという覚悟も心のどこかでしています。地上での歩みがまだまだあると油断せず、あいまいな生き方は許されないということを改めて自分自身に言い聞かせたいと思います。